

虚構としての身体 —舞踊の記号論的考察—

石 瀧 聡

舞踊を記号論的に考察するという事は、舞踊についての意味を考えることである。それは舞踊という事象の中に全体性を保ちつつ連関している諸要素を想定する作業である。舞踊の意味とはそれらの諸要素の関係そのものであるからである。ここでは二つの事柄を取り上げる。一つは舞踊を成立させるコンテキストであり、もう一つは舞踊における身体の問題である。

舞踊の成立を考える際、まず検討されてよいものは、振付家とダンサーとの関係である。振付家はダンサーに「このように踊るべきもの」を与えている。そのような意味においては、ダンサーにとって舞踊は客体的である。そのときの舞踊は、実体を欠いたものである。つまり、その舞踊は単なる表象物でしかない。パフォーマンスするべく与えられるということは、このようにパフォーマンスしなければならぬものであって、それが体験に移される以前に、何らかの完成型を与えられているのである。ところで、この過程をよく考えてみると、それは振付家からダンサーへというような複数の主観の間の出来事には限られてはいない。それは当の振付家がダンサーとしてパフォーマンスする場合も同様であり、その場合もやはり、自らの表象から舞踊が与えられていることには変わりがない。また、レパートリーはその典型である。舞踊とダンサーとの関係は「踊るものとして与えられる」という捉え方によって分化されるわけであるが、このことは観客と舞踊との関係においても類似のことがいえる。すなわち、反省的表象である。観客は舞踊と共に前—反省的な在り方で時間—空間を共有するような「見る」という行為においては、ダンサーのパフォーマンスと同じく「進行しつつある現在」によって、舞踊に対峙しているのであるが、それ以外の時、つまり、ダンサーを目の前にしていない時は舞踊を反省的表象によって捉えている。このような「いま、ここに無い舞踊」が、一時性—一回性を固有の形式として備えている舞踊に関係が深いというのは、そのことによって、我々はある舞踊テキストの背後にある舞踊のコンテキストを判断するからである。我々が（振付家、ダンサー、観客にかかわらず）それを舞踊であると判断するのは、全て、この「パフォーマンス無き舞踊」の表象であって、それは個人的でもあり、一つの文化的に共通して抱えているものでもある。その蓄積された表象に基

づいて、ある判断では「あれも舞踊、これも舞踊」であっても、別の判断では「あれは舞踊、これは××」という分別が為される。そして、ジャンルはそれが多数派を得た時点で文化的なコンテキストとして定着したものと見える。しかし、この定着も常に変化の可能性に晒されている。

次に身体の問題であるが、我々は舞踊を見るとダンサーを見るということは事実である。常識的な感覚では、ダンサーの身体を見ているということができる。まず第一に言えることは、我々がそこに見ている身体は決して客体的な身体ではない。すなわち、我々は物的なものとして手や足や胴体をそこに確認しているということではなく、その身体は我々が日常生活で感じるものと同じ意味において、意識に対して現れたり現れなかったりするものである。例えば、我々は食事をすると左右の手をことさらにテーブルの下の両方の足よりも重大に感じ、歩くときは、逆に両足が大きな部分を占める。普段我々が関わっている身体という事柄は、常にその位相を変化させているわけである。この段階において身体はその一性を否定され、その都度私によって引き受けられる様々な身体が認められてよい。言うなれば、ダンサーは「舞踊する身体」を引き受けていることによって舞踊が実現されており、観客は自らの引き受けている身体に対して舞踊を対峙させているわけである。その一方で、舞台を見る際の「身体が舞台上に乗っている」という感覚は、そのとき我々が舞踊を見る、あるいは、ダンサーを見るということの中で、ひととき「身体が強く顕示されている」という言葉に翻訳できる。このことから、身体は舞踊を実現する道具ではなくて、舞踊が身体を実現するということができる。そして、舞踊が身体芸術であるということは、舞踊が身体を呈示している限りにおいて、舞踊はその呈示されている身体ではない、すなわち、舞踊は自らが呈示するところの身体から切り離されている、という意味を担っている。なぜならば、舞踊が身体と別のものでなければ、身体を実現する、あるいは志向することができないからである。そして、「舞踊と身体の間」という言葉が意味を持つとするならば、それは、その都度「ダンサーが引き受けている身体」、「舞踊が呈示している身体」、「見るものが引き受けている身体」が一連の関係として呼応しているという意味に捉えられなければならない。

以上、舞踊のコンテキストと身体の問題について考察してきたが、まとめると次のようになる。一、舞踊を成立させるコンテキストは現前する舞踊テキストに先行する「表象としての舞踊」が形成している。一、舞踊は身体によって表現されるのではなく、舞踊が身体を志向し、呈示している。